俳諧玄爾波抄

四

俳諧天尓波抄巻之四

○十九家下

○志家 此ニハ世ニ助字トイフ志ナリ。助字ナラズ。コノ注ヲミテ知ルベシ。過去ノ志トイフハ下ノ志倫ニアルコレナリ

〔志〕志とは。ゆかしきの字に近く。その様子を指しめしすることあり。志倫の部に出する事と志の別也。此部篇に。ならふるなり。よくよくあむくみるべし脚結抄に。されど志のしと名づけたく。志のとつらぬ事も同じことなり。くはしくは脚結抄をみて知るべし。昔のさま古事記に昔がよそひしをみしありけむめる志多。これを。これらよくその昔のよそひをしのばずしく。

大沼政守

[illegible]

拾　[illegible]

○乃家　芭蕉

の

[illegible]

[illegible]

荒　兄弟のいろとあげうるもの時　嵐蕉
同　枯芝やまぶげうるの一二寸　芭蕉
員　四のうぐこのあと春の朝敦　為相
宗　抱虎のの小仮を　すぐ　利牛
猿　なるおりひ草　猿のなく　曙
銃　動あるし島のいれかりつ　支考
宗　竹の皮雪踏よ戻るる夜の来る　石菊
員　隆房入巣よ春の方をかるく　多文

春　内侍のえるめ代の眉の図　荷兮
猿　猿引の猿を世知る秋の月　芭蕉
同　一下吹き風の市の呼ばる　同
員　出ぬるのうちあれあれ也　荷兮
猿　白玉の家の知らぬ桔梗　車来
同　鐘の市えるの菊の絵　宋鐵
同　撞より男のうぐいさぶよき　元北
同　鮎少の七尾のみを住うき　同
銃　雷汗乃とうるる彩ぶの夜　支考
員　気乗ぶるのよ知と聲をほぐる　跡水
猿　年の寄やぶれ笠のつくぶう　杉風
多　玉形すくれの　畠　ろる　杜国

員
瓢
同
員
猪

狐つきやはらへのうた
看經の噺
鈴ゐたるの數珠の出のぬる
錆のうたもしどろの書の来て
梅が香や酒のかをひれあてしき

知人
黒糸
縣祝
前号
蟬嵐

ごとくにうたふのごとく。のとつたもの。その墨を所
持あふ所ちごの。あれん所あるが故。むふようき。い
げうたて梅あふあるの。
うた。あるあずりあふ所あひとうあふ。
そうくこうぶれで。中ゆえにうたあるごし。
ゆうるる句どのうた。可形すこれの島こうあと
ふうたを。世業をうたるる島。むふるうたにうた

ある人の和歌を。あれる島に引うさもんとうく。五形
葉ふりちあたせるにて。これうたうたやごし。すごく
天女波のはうり出たうたを。かりうたの義ゆうみうたの
なれど。今えすくうたをふちり。〇まうそふ。
のうたを引うたるがごとく。蕃面のうたあうたごう
あり。されど上古中古はすうたあう事にて。近古
よりおこるのあり。上古をなのあるよりも。こう書をむ
うくうたふあるの。
を書を。うたるたく。四面をあうこうこうをむうする故
上古のうたをこのくいうふるをえず。さうしく
異くうたふる。今くうのうたいひつうむとあうる。
言葉を貴ぶうるごのあるこ。世後句をみうるのれど。

異例をつくふ。その〻ごとくなれども霧をいふべし。こゝろ
をもつくる。中古近古の二句をうたなるまをと
しまつく。んあらんを。かの雪ゝが猿蓑の序よく
よくしるべし。その上古を貴ぶをふつる。こゝを
べの美なる作なる句をとるべきなり。この幻術
とつかのよんつくんなの。俳諧をみ字なるべし。ふ
とる言葉をもとめをもとめをこゝろ。なるるつくれん。なるて
をるつくさ秋ん

荒　　友重
同　　如人
同　　時水
同　　投邨

人のまも無を陸奥の塩竈の
雨の月どこともなしの藤明り
風のふくとうとうの柳の
風のなの星をつぶのの　柳の

員　　荷号
繞　　鈞第
飄　　曲糸
冬　　芭蕉

編編よりぐるを月北　柳の
り鴨や赤風よつまをの強情を
秋ぐの舟をうわるる浪の音
小の御門の　あけのまを
づ西風。舟をつふべる句あるを。皆のけうるよりる
せるをいひ。又を舟の句をくるものをふなり。をを
ぎ式風のふるをとうとうの柳のをふ句を。ウニロ
ニスルをつふんをのるつ
をつふ句を。ツヨク北をつ
をををくつふのをを知るべ
○又よるのをを若づ
あり。これ八上古よりをを

付ふ川ふてそそ　　越人
春　陽炎の如くのうるる夫婦にて　　野水
籍　雨の屋どりの如き年年　迅速　　荷人
員　若葉の如きまりく注ある女客　　元北
雅　世中を鶴鶴の花乃婚ひ

○芳よの前のとそく一首の終りのとつふるあり・春の
可ふうもゆるるのの花とあるうびの物語・いづ
と本よるんの前つくふのりく・ほうく終りのを川
ふるるく・春の句のを例ふ・ごとにくのるる
のやうるるを芳ふとをふるるあるを・むつう知やうに
おりひとくつるれざるるにや・如何くむつう紀
年をなるるびる・ぐ何がドウアルとふびるるが・ドウ
アル何がと例ふつふざるるすく・例句のるをふる論ド
ふるるぐ

[この]がとふふをを・ふれの前るを物ふるるるを知るるるるふんるう・のとふ時を・
中ぐるのるるる物の特合をさをすんんのをるの
るの他ふとをるるをさをすんのあを・ふるえて
るるぐ

飄集春炭冬

世川の月紀の関雪が頑了
知きるの雨や雨施が合歓の花　　祢頑
杉の木ふ文可ふが門ふるふく　　芭蕉
船又がのの火桶ふ知ふるるる也　　雨村
日乗の木ふ白が協ふ月をふんく　　其角
　　亭玉

員　後ぞひよぐいふがうまきあさ　都人
統　れがが年をよるとる格の愛　芭蕉
同　孫がのうとる新松の借濃　馬蒐
猿　ぼきも盧同が男子指なりにく　史邦
同　花とるる西瓜が衣易く　芭蕉
同　物りる命ゆくうぐが会るこの乳　尚白
同席　こるが席しるのの新と重こ　其角
統　聲が年こみりもぐる相語　支考
猿　摩郎ごうくるるるのうる　野水
瓢　数白つる影松が早いぐ　曲水
員　宮月が書ゆるるてる紀　朝夜
猿　丁雑が行よるうぐうう　孔北

員　ぞうぐよるるるしる地のが麻　荷号
炭　麻百が樫の小節を抜るく　孤屋
猿　ぞぐしるがる孔紀の寺宮るるげ　梅夜
荒　松かぐう伊勢が郎男ふんる雑　其角
同　山ぐつが栗山るつりるけるる　宝文
同　松る雪や小町野が宵のえるるよ　的雪
統　書百や光うりるる鍛治が延　桃夜
同　里みるが燕に書新年茂る孔　支考
同　小米も茶ふる良めるづれや船茶　万平
猿　反草やつるるものどもが茶の浪　芭蕉

るるるれるるつるるふ法のぐるるつるる方也・中ふ
るる法のれるるけるる俗語のがるるるる・今ふ世ふ

これをよくよく見て。いかなる者にてもかゝる雅俗のけぢめといふに。まづいふがごとく。新さすべて。其の歩み様は使用するあらはくいふ時はゆるふ物なるを。ぞ。此なる句は古きよみにかゝる物なれば。新にとつぶされ雅俗也。此ゆゑの品にこそ古きまでにこれ新にとつぶ也。こゝのまゝ引ける「縁」がはしる雅文の俗俳を以て句。新にとても一ふた新とつゞけり。よくつゞきて見ける句意。雅文がらしくる俗俳なれども。今世句意なる。の俗俳が句意にて。又其の縁と雅文に用ゐらる。くるなき新なれぞ。新なる句なれば新は。新と俗ゐなり。これらなどを雅俗の新といふなり。雅俗まで見るべきとぞ見るべし

炭　雑役の鞍をおろせば日がくるゝ　野坡
同　時鳥啼し此が雨のぬる　利牛
同　馬が出ぬとてかへる人数　孤屋
続　花のかに躑躅の方が勝りたる　里圃
同　荷がちらりくと通る馬つぎ　同
炭　新坂が漸く出来たる筋　野坡
同　聟が来てくれる嫁の世話する娘なり　利牛
続　夜涼みやむかひの店まで月が出る　里圃
同　山かげや猿が尻抓く冬日向　一谷

これらいづれも古き者の新といふべき句意也。よく味ひなく見る川べし。撰しくいれど。新の上句まで下撰し。新の上轉くは重しとみるべき也

〔へ〕 ○邉家

へとは方角をさしていふ言なり。萬葉集にハ。方の字を。へとよませたる所多し。行方(ユクヘ)なとの類なり。後世ハ仮名つかひを誤りてはとかきたがへたる紀事あり。後世の人ハこれをわきまへず。きたなきさまたゞへといふべき所をもはとよむなどこれ甚だ雅にして。へハ俗なるやうに心得るがゆゑ。俗にはなれたる方をいふべき所をもへといふはよろしく。さるひがことをなすものなる者の説なるべし。これ平言よりと字国にハあらん。さてその方の川。かはへのもてそよ寺なる古今集に「河へゆく」なとはなくなるなどもあり。はといへず。これらつぎつぎくしてもはいふなり。

へといへど。これらをさへもはらいふべきを。言をまちて詞とせるがころく也。古今集秋の部に詞書「佐保山の」なりてくれなゐしまし。はるかとかゞみあり。これ後世の人の心得ぬるなり。上ハもとよりへ。ハ遍照が家の作のやうくのさらをいふ。そのゆゑくし紀家古今集長安なれば。中にはへといふなり。これ五十音のい紀と元紀との似ゆれたるなり。かくいひなほしてこれば。へもはとよむべし。ほかにへといふべからぬ事明らかなるをや。されば。いづくゆくへと問ふ。方角をさすふんなり。いづくにゆくへと問ふ。その中にゆ中にはるかなるを心得たるべきなり。「野べ」「山べ」「海べ」なとつらねこれら也んなり

荒　ひく息もしらぬくらぶ柳かな　野坡

炭　松坂や矢川へこゆる裏通り　其角

曰　海へ降る霰や雲に波の音　素龍

員　さゞれや讃岐へ急ぐ舟の櫓　野水

続　供奉の草鞋を旅へまとはす　卯雪

炭　菜の花のかをり奈良へあげくる　桃隣

曰　背中へのぼる子を可愛がる　鉄水

続　せつくり立てばもつへゆく道　里圃

炭　十里ばかりの小さく出て立　利牛

曰　わしろを日向の方へおざしけり　野波

瓢　お顔へ菊がしもかゝる迷惑さ　孫頃

ふるもと出る一方へ移しけり

炭　隠部のごとくうけみをとる　芭蕉

続　柳のそばへ門を出て行　里圃

集　その玉を羽黒へかへせ法の月　芭蕉
悼遠流天宥法印

曰　山城へ井手の駕籠かるしぐれかな　同

○良家

[ら]　引とらふてるときは。その為に同じやうなる物のむかふにあるを、さし示す詞なり。第三等の字をあてゝつかふなり。らくなる物「ゆれらちなどゞふこれらの心也。古くは、古今の詞書「あのつかひ、又其の外「らまらなどにある「まとられあるをつかへり。これらは後世えつかはぬてにをせ。べしなりとぞ

てにをはのしられぬ也。くだ／＼しき御詰難に及ぶ。
狂に上古の言をいふてにをはあり。これ等らのなよ
ひとつ也「とりたるは「よのれどもなどつかひたり。
イヅレモ万葉集ニアリ らんらしなどつかふらし。即此らあり
とみるべし集中例多くす

○能美家

のこ 此ことば、俗言に・バカリ・バッカリなどいふにあたる
るよし。俗世にては、このことばかりを混じてつかひ
まかるゆゑをえせぬ也。おかしみは古言につかふ也。
その事のしぬるんとさとすべし。のことふみ。その一
節をかりたるんなれど。おかしみは御ありあ。のこは用ゐ
り。その用ゐる節大かたぶくり。よく知りてしかるべくつかふ

例へば
冬 とりつくとのこら地蔵切る町　荷兮
春 こやくくのこ神輿のく星　重五
日 蝶のこ飛びてゆくし乾の風　野水
日 ...紙のこ考雪のやらし　越人
日 郭公白酒のこと知てぬる處　李風
曠野 貝足ら名て鶏のくらいと月見年　野水
　素堂くマカリテ
　ちすの宮れぬけつきし蓮の香　越人
集 月のこゑ雨に角田川にあつりなり　芭蕉
などに摘のこくだりにいるにあらず。事の傍になる
ふるさるる紙いふる紙知りるべし。狂に此次の事かり
の条をわするくなるべし。されば此のこの事かり

ものとなるべし・事のうつることあのうつることもしらぬなる

だいり

だいりまつりごとは・よろづにふるき・和のあるべきなれ
ども・ものとりあつかふ・のりとだうしなどの号
れ・御結髪・よろづ・ふるきなれる事

員　敷のものなるだうしなどのよの世　都人
炭　損だうまつりくかたぐなる事　板屋
荒　ものくさだうの花のよるの山　貞家
円　今年ものとぬだうの藝　老之
円　書だうの日のさきの河のすまれる　乗泉
円　寄の日や川筋だうほそぐらと　警行

円　雨のよるとかたぐ事ゆくの筋　合咕
円　妻うまつくく葉のおぶだうのうち　不知
円　ものくさだうの蓑ゆるしくれる　家下
円　相ものよ妻だうみるる事　生林
炭　洗物だうものとどる　ヌ月　駅破
荒　生ものだれ（ノミマカリシニ）のうり彩ものだうも　前号
猿　やぶの雪の柳だうハ浴のよ　梅丸
炭　月ものあげ俳のものだうの　利牛

ものどものうち・貞家が若ものうちこれをうつ事だうの事
とうふのうちとものくだ・何ものやんのうちうふべ家の
のやうものあれどさてものあるず・上ものこれをうつ事
にて自ものとうつ事ものだうの汁をうつ事

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

○俗言ふゝう井ホドダケちがふべきあるもあり

崇荒　重ねうちだうりのこる　石月　きぬぎぬ

腰の立ち（三ヲ）　一言

同　一ひぶちうつくしき　御山　仙化

員　さうづもうまうるだうのかたあり　昌碧

えいづきもの義ハうあるあり・やぐくホドとあ

ぶうるうち

崇　帯ほどあるのあがるうち　沾徳

集　さ門雪やあ他のあのさむ　芭蕉

うもあり・きうるうこうはだうとつふ新なり

吉ふるだうつうあり・又ことうとうの別あり

うもあうとふウナとうあうあうり・或

のうど一まうのうどうまうつふうもや

まで

までとふ句・うたがまるるうしぜや
すきぞ句・たとへば・一巻こもるまでなるまで
とよむまでなる廣のちまでなるまで
さてふ句・さればぞ世せを・うとぐらでで
なるどつ四ふ・世をとりあるぐ・それをとら
ずして・と限をとりる句とのうんえんあど・くす
くふがぐく・句をとふみなぐ・とを
ふのくあるず・そぐでそ節のさぬるあるの
用なぐ・ふとりする限なるぐ・引で
とふとりあぐぬる・かの一つとりとりうとる
むするぐとふそも・小石のとりとるぐ・をを
やをふのるとくつのふ・物をのむふ限ふる。

るぐとふ・うとるふくのんのをとぐすぐ
知所なるぐ・とくぐつるる・コレハコレマデ
沖出茶しなどつふさ・言関るぐを送るぐが門
前るで送りうるあるの村の句なく・即おの行
うう古義のごとし・又小史ふとるる句ぬ・コレマデ
オジヤツタラ耳酒ノマツとふ・これうのむふるるふ
ぬの足とうとうとく・我ある示るぐ来るるぐの
力なるぐ・誰をを耳酒のふせんとをとをん・ホろ
の笑ふが示るをるぐずくくぐまるべし・ホろ
の足ぬぐうじと・むるふる限をとをくうの限より
こなるの限をとすぐ・さるぐるでとふ句を
句とをる大抵人のぬりとをつる示なる。うの

むかふの浜をさすと時の移るまぐし　杜国
荒　八重霞奥ふかぐさる新田川　芭蕉
うすき・はるの二重三重・あるひは四重をかぞへ
とたてく・はるく奥ふかぐさをいひくたり
荒　いざゆかん雪見こころぶかきまで　芭蕉
同　海まで提て抱くく月ちんの子　任他
同　鶏頭の雪ふりなるまで紅のか　市太
続　苏子蒔と畑ふでやん月ちんか　宮牙
同　二見まで雪ふれる見ちんか　支考
冬　野蔦までふれる葉のそり蔦て　芭蕉
剽　みこの月とのぞくまで見ふくう　同
炭　参までなるぶ日なるこ見ちんか　雅坡

員　八日の月はすくくふるまぐ　荷号
棺　まるまるよりくふぐ年の暮　芭蕉
続　うすきやう梅の蕾までや梅の蕾　魚日
炭　白まで水ふくこのあるあやめか　桃隣
同　婦の印まで相のひろが影　同
冬　ふぐふくふぐ世界のひろぐ　荷号
剽　潮のさす極のトまで日和ちう　孤項
猿　雪ふまて雑まで炭ふ出雲か　花紅
同　なるふいとぐ塩ふるうのこまるこ　如人
同　魚の雪ふるこふの花をみそ　芭蕉
炭　ふ門沖まぐたこのる八舟　桃隣
この桃隣が句の・ふ門沖ふぐ沖ふぐ・ふこ

ふ漆とふものとてこふ物・すこしつゝひ
やうゝゝがひくるやうゝふゝゆれど・なをくよりにゝも
こゝをくゝより行くゝも・物同じ清あるを
世のゝゝだかりるぐくの言を・つゆゆるゝが
ますます天下波ゝ・これ同じ程性なる
天下波ゝのゝれども・あるゝゝ家をひ
とつゝ出せり・これりが広文の見解・聊
結物のてゝゝをめくゝゝ知ゝり・これ
ゝの新見をにゝ知べし

○陀尓家

だよ

ぐゝとゝふ頭ゝ・俗ゝのサくゝとふ頭ゝある頭也・
又跳ゝふるゝ・願ふん・物ふるゝ・物ふるゝ・ゝぐゝを

ナリモとふ頭ゝあゝう・又うの形・デモとふ頭ゝ
なるゝる所しあるゝ・ゝとゝゝ・指ゝゝくのぬゝ
ゝゝ茶碗でゝとゝふ時ゝど・指ゝにゝぐゝの先
ぬとつゝふや・又跳ゝくゝゝ・ゝゝゝ・十日居ゝく
ゝゝゝゝゝはせめて言ゝゝゝゝめてゝれつと
ふ・ゝれゝと言ゝぐゝにゝゝゝと・又願ゝにゝ・ゝと
つゝぐ・茶面がゝゝゝれど・せゝゝ明鐵ゝゝゝも
ゝゝと思ふ村・羽鐵ぐゝゝゝとつゝふゝ・又物ふゝ・
ゝゝゝゝ・打擲ゝゝもあゝがゝゝゝふゝが・せめゝゝゝゝ
ゝゝゝとゝゆめゝゝしゝゝゝ村・ゝゝゝゝすれとつゝふ
ゝ・かゝのゝゝゝすゝゝゝゝゝゝゝゝ・ゝ外郭
ゝ面のゝゝをつゝゝゝゝゝゝ・ゝゝゝゝ陽毒伝語

に。此ざれ歌もさくてといふなり。ざれはさく混じく。ゆゑん
すべられをよくおこあやまちぬるやうく聞なり。
俳諧古流を後頼をやかてけるものなれども
あしとをいへども。ざれとつひをいつ聞るやうあ
る。自ぐもんえてく体自在をもれすぐるなり。此家にも。
此集中にも。ざれをつられたる例八みえんずして。
のこずさくてを付りひさるものことなり。されどもこの
さくとつりひさる中に。さることのさくてはまずしれり。
此次の條さくのしきよりくいふ歌にあるらくみる
通し

さく

さくて。萬葉集に副の字を作てとよみ侍る
みつられり。されをよみるに。即ち副のいふある詞く。
邂ザレバナリ喑 副とよむ。あてたるものはかりく。されはそひ
たるものなれどい。ふんなりけれど。大分波に他ちの時の上
たるものこの。さよふべくあるざるものは及ばざるをいふ
詞く。又よりよみぶべきものなり。さくてといふ
も詩なるべし。さくて門さくや萬葉のか
歌みよんといふ歌。現にさく目をくす
この。ざれの萬中にもよみべる歌に有と。
即ちの書にはく。めざるが有る、なれ
めでたくし。歌にさく寺詞く。書の中にある
歌にくかあるものといふ。歌と。この副たる
方ならりといひてく。さくるあるといふべき。例の

言葉の花につきて、たとへば…なるなれば、…
よろしくつけられたるものなるや。よく
…知るべし。さればこそ古人のさく
…そのマデ…也。古人のさまを…
…ありといふべし

荒　これぐらゐ…の塩あぢ…　千那
宗　早…みえず二十八日　…
猿　すゞしさや…のさと…　…
春　馬をさへながむる雪のあした哉　芭蕉
続　…調子あはする…の雨　乃龍
冬　…志賀(シガ)楽(ラキ)の坊　野水

猿　幻住記
…山の…出…　芭蕉

日
荒　やどかし鳥のさまさへあるを　同
　　その人の噺(ユスリテマカリシ)さへあり秋のくれ　千那
これらは古言のさまをかりたる句どもなり
荒　なやめ…のつら…　荷兮
猿　…旅人…石部山　智月
瓢　…那須…　珍碩
荒　すゞ…夜の炭俵　其角
これらもつゞきてはあらぬ句どもなり。中にも
其角が句は一夜の炭俵と下に…たり。天に
波を…ありて…すゞし
といふは、…炭俵…
…落の…なり。…　御…

みちのくぶし・芭蕉翁の画賛なり・嵐雪が画賛
蕉翁きやくのうちさくらかやとふ句・まつ
うちとけるあるじ・ふんなれば・蕉翁俗語の
さくらぶ・其角の句づくりをすぐれたるもの
なり・くぶくぶ心ひくべし

○余利家

[illegible]・すぐれ・さて所一處あるべし・うち
ちりあるひとうち寸時の間なり・三例あり・づ
きて・うちよりづる事・人のとひかけあるべし
よりづ

○第一例　いづるようと云

荒　同　同　同　続　荒　同　続　荒

うちとけて・年よりあるゆく・内よ
り外へ出るなどゝ云時つゝ用る・俗語
カラトと云

うちうちよりみちれば潮のさゝ波
くゝきうくゝきくゝきくゝきくゝ笹の
ちりあひやゝ初もよりのあるまれ
つくくし所中よりまるひとうち
巨燈よりうゝ燈るゆく時き夜果
ゆくの初よりいづる　ちくうゝ
ひゝよう義ふよ抱ふやうゝ家のもの
すぐしきやゝ極よりはをぶきげる
竟ゝよりゝ酒をゝ向きう

久々松
風笛
聘氷
まさ江
雪美
嵐導
文考
魚洞

統員猿冬春飄猿同同同統炭

中国よりの秋の吉　右右
惟茂
なをよりも酒あげするむぎき
なく人
ほくぎ国よりのわらび
ぜんまい
秋より視てひき山うげふ
蕨蕨
岩のるより義ふゆる　里
物多
なのより新鮮なぬ別しく
荷弓
寒ようえくるせのうらふ
秋ぞや四上中乃くぎ
高白
ろのくや義のうちより和尚
且菜
鷺の新知るめくより山形ふ
武之
七ようえるおせる中ふ
陽和
与力町より村ふ　西　北
利平

同
春

知りぐす薪のよう始めて
島井よりまる奥の神中むて　昌素
はりどるのうちよ・第二例のごとくもあれど
さるあるず・ようを句こるを味ひくを知るべし
くとよ芭蕉野　員外の「風」をうもとあるハ
ぐびやするるべし・ようふへくを
○第二例　おくようとを
おくとを・岸丹和ちくんにて君と
寸・俗ようりまを・ヨリホカニとなる・これ
又うのさくをくをくをあの句にて
おうぬが為あるをるをあの句にて
雅中義ちぐをぬく・子ちを・月

くさくさ
よみあり 集中一例 文えず

○第三例　ふるさとるよりとも

ふるさとの序方のふるさとるよりふる雨に
れまさくさのまきる方ほ歩きうと
人のもとをむくろをさてつふ雨に
とちるべし

小より冷彩月の雲切　孤屋
雪の日れ大ふみよりさ小雨　芳川
雪雀より上るやさくふ時雨　蕉翁
泣ふも野かるなあげくふ親　順礼の吟
芋の葉やふるめくる紅より雨る衣　路通

炭
荒
同
統
荒

柿屋より見ぐるうきる蕉翁　一笑
きめぐるや俳の事より時雨　除風
河より寒くい十月の雲　桃隣
雑より雪をさ紅くうんくとる　蕉桃
海より雪着のやまき見えて　支考
すぐれや見れよるさ紅る夏の花　乙州
文塵雲の蕉や高より秋の花　桃隣
風や沖より雲ら紅　山の紅れ　春甫
雑汁見れ着よるくるりて　蕉翁

統
荒
炭
員
統
猪
炭
同
同

さくめる蕉がくる・紅くさ雪カラとるよ雨や
ぐくりくとつる見よる雨・・・ふ雨雪の加くの
雨ふりくるるるぐ・・・

から

うくとつかさ・くぐしよりの係係のやうに如なる人あれども・さうなくば・古くよりあるてよきも也・中昔のひどよりハ・よりまりの高雅也とや・如也ひらんあるなどよ幸浮時いつくさ・ひるとよろん兄弟あるも也さうくさなどつくるひるくみえぬハ・今よみるもや中昔のはよりかくあるまりくこなるれるをくさ・くれはくつる・くぶりのさせるさうよみなるるようのもあり・よりさよりも也・くさうや・ゆくくとくつさぐ・くでハ自古の変化をきん・はせくぐまだうをみぐくるとなるるるあげくぐ・くくすくいが 和そくうなれしよりまの事なうくう・くるる二例ありくく・

裝くくと云・名くくさくくあるをくけ裝くくさよそひの頃をくくるはくく・うの名くハ・はせるまくつるふく・いくるる・我くくなどるるるり・称よりる・故の字を用てかれを別して・上古ある・即はんく・されぐくなるるるあれ・うの故をふくくくくふ頃く・よりまりくと係因なるるんはくく・うのるの頃より而をきめく・さくくこるるのるるくくふるるれぐ・くくくくつくぐ・かくくかあるはくくく・よりまくこるくくくるくくすくるんあり・これまくはくふるぐきんくくえくく・何もつるどくく・うの名くくくくあ付るくくくるる頃くくんえくくつくふ頃く・集中例くくぐ・これくを係くるはカラと

ふ詞あるなり。かく別ふ引ふてるもの。そぞろ
りのたぐひめなるもをもそもそもそれざまま
なるべし。これまこと俗人の後ちの後。よるふこと
くこれまこと百年だろ前よりの
ものなり。かくぶりんなるこえつるまざまこと俗
さつすし也。集中引ふてるひとこれ引
の俗語のまこるつひふるものなり。古ふ
これ引ふとつふべふ。いづまる定一例
のよりの俗語なり。第三例ふ俗ふ古言ふ
荒　若ふふすぐるなづめのみ
統　後ふびの内儀ふ度度数ふ
炭　ふけぞ踏ふるなり

同　孤屋
兎　兎兆
猿　股引の朝ふぬふ川ふえて
統　きのふふ日和ふまる月の色
同　山ふ石ふ為ふとふ寸
炭　賣り人ふふ
同　川ふすぐる小船ふする
同　氏の花ふ十二ボふる家
狩ふふ。かふる。ふのふ。づふ。ふづふふ。川
ふふ。などつふり。ふふ。ふふふふふ。ふ
ふふ。あふふふふ。ふふふ。ふふふふ。此
モノヽクセニとふ俗言ふ用ふ多知ふ

同　孤屋
兎　兎兆
治圃
同　治
炭　石菊
桃溪

[ゆゑ] ゆゑとは。俗にいふゆゑといふ詞也。これは上よりいひ
くだす詞にてしもへかゝれる詞なれども。かくといふ時はその
のかみよりおこりてゆくにいふなり。ゆゑといふ時は
その内の数をさすなれば。しかれども。ゆゑをさすの
事よりおきたし。かくとさすの起より来るさま也。
されどこれも。詞の前にて変化はすくなけれど。今は
その大抵をいふや

蕉　ちるゆゑぞ粥すゝる身は楽しさ　去来
同　蕎麦は花の花ゆゑにとられる　蕉雀

この句[なるがゆゑぞ]とかゝれるなどの。かくとゆゑ
とは本その初めのわけなるやうにかはさるべし。此句は
その楽しさてたる人の楽しむさまを云ためなるべし。

云しこれぞ。たのしみの考よりて楽しむさま。その故
然れしてかくのごとき。かくといふ詞あるべし也。そのゆゑ
ゆゑのかゝれ。よく心得べし。俗語にワケといふ詞よ
くかなふなり。

○並に。さのゆゑとよむ詞あり。上のかくと同義
の詞にて。モノハクセニといふなり。されどかくの
かゝれは。世かくとゆゑとのかゝれに甚ちがふなり

○那牟家

[なん] これをと申のなんと名づく。玉篋のしるにいせ
る説のなんも。又此下の六倫のうちの玄倫のなん
なるはことなり。これ多くの文章につかふなん
にて。並によめるハつとめてなし。今世に和文など

かくとて。いかめしくきこえん侍るなど。いかなるあしくも
あらず。つらつら多し。ききてよくしるをみて
おもふべし絶妙なるにあらず。俳あそびは用ゐられば
なるべし。ワガアラハセル言灵弁ノ附録ニ俳文とて一章
一段一篇のうちに。うち紙もめでたくはかりごとなき
物事には。俳文とかくつる事なり。されば。俳文
とふ句題ある所を。すぐにくるしみにて意をつくる所々と
みるべし。俳文とふ言なし。すべてかくは混ぜずし
て一方へよく持はふるまでをむかふはまた悪しくいふ狗
あれども。くまものをとりは知りするは。ふかくむかふのなは
かくかんとするんや。俗なる。物語するうくふ。
ドウシテナとふなる郎られにて。すうく紙きく

くはあつくかくかんとていふべし。あるまじうれ
なんうれとう川せうんしくなど。よめり。僅中
句はたに例みえず。文章のうちに

猿 幻住 なるじの俳何がし。勇士菅沼氏曲水子
の伯父はなんなぐうし紙 芭蕉

炭 序 風吟をもうり篇なりて。つゐはなめつらのかき
やまはわり何となん 素龍

なりどみくくり。いづまてルラの文はむかひかくるのさ紙
味なるは。ワガつふ所ぶなる事をとるべし。上古は
なおもとつくりやる前あまどもれわくみくさ

○碁登家

ごと

えを毎のんをり・羽をうけうるを・タビゴト云
なをくみうるぶ・ことのくを者をうけうるを・俗をうるも
日ごとやうるふる・えをうもうをうるを・言ひのうるうる
五六年ものうんをんの初のものを・言ひのうるうして
ふけの羽ん

集　えをうけ田ごをの日をそこの花　蓮意
同　鮒すごしもぶごるむけや瓜茄子　同
同　雪ごをうけだうを見むすうるを　同

○毛天家

色て

えを・ものうみんる・ふをぶ・筆ものうをぶごし
のするをぶごふ羽を・筆ものうを羽をうく

をごふぶうぶコレモ故アラバ云ベシ今この羽を集中
例をぶ・さてまををて羽・ものうを日数
の羽をう・ふんものうをも羽ふぶごを・
をれど・ものうをふを・うの羽を重るうふん・ふを
ハうの羽をうふひをするんあり・伊勢物語の「つい
ものすをうをうをを・花草をる
勝る雲のうるうををふぶ・花草をる
うをひをるうるんをう・いづまをれを

炭　紙帽うをぶて来う酒の器　をう角
をを俗う・物イヒモッテヌクちぶうるモッテを・ものを
ををるをうをうをう・いけのうをぶれ
ものうををぶをうを・又ものをうるを

なくてとふべき歟。一説、又二居テ
デアツテもどつゝ引ゆるもあり。
御結ひなるべし

集　園翁もてなぶるこん人の背中つき　芭蕉

○加保家

かを

こゝもとたゞ・顔色もどつゝ居の・てゝもとにもなる
色也・さゝくば・一説、あゝ・ゞとふ詞也・立にもなる
ゝ・しゝくゝ代をつくりてゝ・ゝと言也・
さるゝ・ゝ物のおもひよりて情ある・又
くゝおもひつゝ・さゝらよりめぐるがゝ
うのゝくさるゝ・ゝみるゝごとくいひなして・

我思ひよりて情をさそふ詞にて・ウシイヤウ
スカナニゾノヤウニもどつゝ侍るもあるも・源氏
物語ちのごとく・一説、ハゞ・ちもどつゝ・えハさるゝど
みるなるゝをもとにてたゝくはんあり

荒　ゆくもんえどゝの　野寺　秋水
続　とて草よりれ獨さのや園の繁茂　蔦市
集　菜畠に乾えゞ侍る也　芭蕉
同　寺よ蕨てゝとがゝなる春風　同
同　山吹の家葉のもれてちゞ　なるや　同
ゆゝがゝとて・卿ちの俗語・敬下して・ゝまも
なるもゝ・ゝふやゝすなりといひて・ゝゝ
ちんのゝゝの八形をゝゝん・ちのゝゝ八・花し

あり・四方の中なるなどよつけて・人も多くまて・
木の門〻寺のに死たるなどが・悪気
てきさびしくくちのうめぐぶさきなる食べていと
く耶蘇の匂ある・さるバ狐をつきハ我なそ
くじと・わがんの事れをこそ・四寺の俗俗
みよもてきさもるを・ふてきる匂をかやうきそ
なくきるれ・四そこふ字・寺こふ字・その字
ひを持る魔さ・半ばなるとこそ所より
おりひもてきて・こそ・のぬ・ひ・ものへ・
れるより我蕎のもくこの・ふるるをそ・四寺
の俗俗のんてこふ・四世人のおひ
よるるじ・ひるゆん・こ・ものもくをはそ

とて・数年ハさがれくこそ・千家後の
醜をかがくし・今は書るよまて・俳諧者のて
も・おのをさくくし・又その次の世義後
のもし・こそひるくさるこそるハ・こと・ものを膳より
こそふるれど・こそハさるるるふるあとふんくく
義・おにくもよるなるびあこふ・ふるるる
けが見識をさくるを

あがら

○那加良家

あがらとふ句・四世こそハ・半ばナレ尼ジヤ
ケレドモちるるふ句のごとくあるハあやるる
ナリニこふ俗こそある句・くだ・出者労

あづまとてあそび・はる昔労あれどものん・さうあづまとな
ハ・さうじやれどもそふんとあり・さうず・
はる昔労とそ・はるゆてくれる
きよとそふん・まうさうでてあるまとそんあう・
ゆうぐ物るものさうしてそはるまつ・はるゆてくれる
うれあうにしまうくふ・うる・うれづくそふ
初なう・かの伊勢物語の同なうあづうるそで
みうあどうる・るハ・はうあきものあれど・うれ
そうそうけうくそうぐ事なるる・ふをふあう
筆ハ筆あうよるそとそふんにく・即うの数なうる
とうふんあう・はうそふんうれ
続　ひうるや物くうるあづう坂のと　惟然

荒　あるるや年よ十二をあうあづう　文鱗
同　すづうさうよ白雨あづうの日新　吉東
同　あうあづう意あうる事あうる　小春
集　夜あづううあきうあのうづう　芭蕉
同　年ふるぬ笠ふてやうぢをあづう　同
荒　枝あづう雪うるゆく男深ふ　會時
同　むあづう西絶をうくさうる牡丹こうる　越人
同　かうあづう師走の市を寄るさうん　同
続　塔よあうく月ふあづうや蓮様　利合
同　ゆうく月ふあづうの雨あづう　沾圃
猿　寄のうくうれあづうる市の茶ハ　元北
同　うづうや窗よ茶をさうるあづう　魚月

同　苔ながら花に並ぶる手水鉢　芭蕉

続　ぬれ縁や薺こぼるゝ土ながら　嵐雪

炭　芋とむながら居風呂をとる川(?)　孤屋

猿　下闇や地虫ながらの蝉の声　嵐雪

いづれも其まゝにてかはらずして。かくのごとし。ながらの心なるが分ずでにをはにて

まゝ

これなれど。「まゝ」と云詞。「まゝに」と云詞あれど。上古也。「まゝ」「まゝよ」と云ひし也。俳諧の「まゝ」とは其すらしくなる詞也。いかにとなれば。萬葉杯にく随の字をよめり。俳諧まで此それならぬる中にたるべき時は叶ず中にあれどそれ

也なりき。古今の「なげく」と深げくる也。此意は。二三タガフテ　ニツイテ　心マカセニ　せずと御指南ふ説しかり。其のおもふめあるはこゝろはなぐさむやく也り。これ又なぐふべしめるとへのなぶがを　ことにるなり

集　柴の戸に月やそのまゝあみだ坊　芭蕉

荒　蓮やくちのまゝのおもだかさ　文鱗

同　さればこそあれたきまゝの霜の宿　芭蕉

炭　出てゐるまゝに脈とづく数　野坡

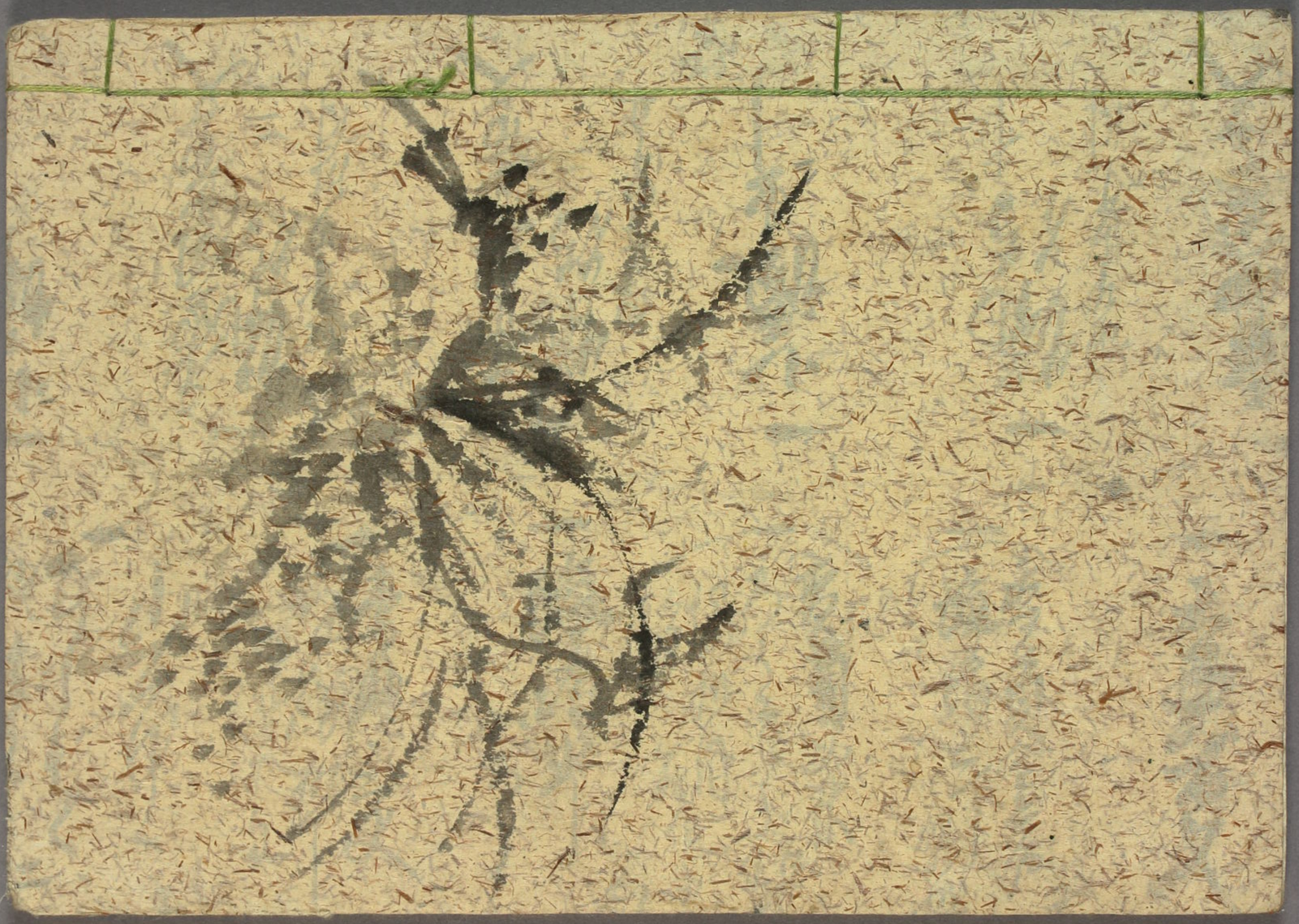
同　投られしまゝなめつる也　孤屋

「まゝく」「まにまに」などは例みえず

かてて

○加天良家

ぞくとつかまつる。引のそひとる仮名。一かなをつかまつる加ふる。引をそへてつかまつるなをもてくみるべし。仮名ここまつるにはべし。文カタぐとふんれあるも。ひらのるゆ文一事をくりて。すくんをこと。文文一事をくりて。事くとんのるべをこと。るる引。すべみがてくるにはをみるもをつかまつる。

俳諧天和波抄美之四　終

仮名遣ハ口ヅ引なるる集中例みえず